

非営利法人ニュース

2020年
9月号
Vol. 88



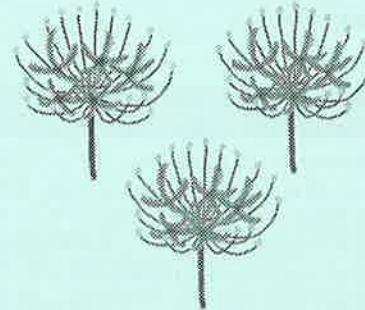
発行 公益総研 非営利法人総合研究所
東京都港区新橋6-7-9 新橋アイランドビル
TEL 03-5405-1811 / FAX 03-5405-1814
編集協力 (特非)国際ボランティア事業団・(公財)公益推進協会・NPO法人設立運営センター

★★ 返済のない奨学金のお知らせ ★★

【1】「タクト奨学金」

『税理士または公認会計士資格の取得に専念する25歳以下向け奨学金』

- 応募資格：学生または就労していないこと
かつ、以下の①または②を満たす者
 - ①税理士試験2科目以上合格していること
 - ②公認会計士試験を1回以上受験したことがあること
- 募集期間：2020年10月30日まで（当日消印有効）
- 採用人数：2020年度の奨学生は10名程度を採用とする
- 給付等：年額20万円を支給します



【2】「中村道子奨学金」

『介護福祉士を目指し専門学校へ進学する高校3年生対象』

- 応募資格：2021年3月卒業見込みの高校3年生
2021年4月に一都三県（東京・神奈川・千葉・埼玉）の
介護福祉士を目指す専門学校へ現役で進学すること
- 募集期間：2020年11月30日まで（当日消印有効）
- 採用人数：2021年度の奨学生は3名程度を採用とする
- 給付等：専門学校2年間（24か月）、年額50万円を支給します

◎情報満載！今月のもくじ◎

奨学金情報	1
非営利法人関連情報	23
CEOコラム	4
編集後記	4

【3】「逸男記念 再チャレンジ奨学金！」

『一度進んだ道を軌道修正して再チャレンジしたいが、
経済的理由により困難な学生向け』

- 応募資格：医療・福祉・看護に関係する大学又は専門学校に進学
- 募集期間：2021年1月12日まで（当日消印有効）
- 採用人数：2021年度の奨学生は3名程度を採用します
- 給付等：大学（専門学校）在学中 年額60万円（合計240万迄）を
支給します

※詳しくは、財団ホームページ（<https://kosuikyo.com/>）をご覧いただき、
申込書等はHPよりダウンロードし、必要事項を記入して提出してください

☆奨学金応募先等☆

【1】【2】【3】奨学金

→公益財団法人公益推進協会

応募用紙等郵送先
〒105-0004
東京都港区新橋6-7-9
新橋アイランドビル2階
(公財) 公益推進協会
担当 高野宛

- ・タクト奨学金
- ・中村道子奨学金
- ・逸男記念再チャレンジ奨学金

お問い合わせ

03-5425-4201
(問合せ対応時間：平日10時～18時)

※奨学金、助成金情報はリンクフリーですので、ご自由にリンクしていただき情報提供をお願いいたします

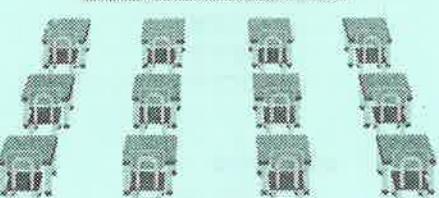
★非営利法人関連情報★

ホタテ養殖残さ活用の堆肥無料配布

蓬田村のNPO法人プロモーションよもぎたは今年も8日から、ホタテガイ養殖残さを活用して製造した堆肥の無料配布を始めた。配布場所のハウスには初日から多くの人が駆け付け、堆肥をもらってボランティアスタッフと交流した。同村で製造している堆肥はホタテの養殖残さを活用しており、海のミネラルが豊富。同法人のメンバーが実際に野菜作りに活用し「生育が良くなつた」と効果を実感している。2018年度から希望者が持ち帰られる仕組みを整え、人気を集めている。ハウスは蓬田村中沢地区の国道280号沿いにあり、同法人の看板が目印。配布は午前8時半からと午後1時半から。袋は持参すること。無料配布は堆肥がなくなり次第終了する。(陸奥新報 9月9日)

保護者が校舎消毒 自主組織が初出動

新型コロナウイルスの感染から子どもたちを守るために、教員の負担軽減にならぬよう、府中市立府中第五小学校で、保護者がボランティアで校舎を消毒する取り組みが始まった。保護者有志が結成した「スクールサポーター」の活動の第一弾。平日の放課後に参加できるメンバーが来校し、教室の出入り口などを消毒する。スクールサポーターはPTAとは異なる自主組織で、8月下旬に発足した。希望する保護者が事前にメンバー登録し、各メンバーは来校日をメールで伝える。自身の都合に合わせて参加できるのが特徴だ。同校に子どもが通う590世帯のうち、65人が登録している。活動初日の7日は、保護者14人が来校。教室の出入り口や階段の手すり、トイレの扉など不特定多数が触れる場所に家庭用洗剤を吹き掛け、ぞうきんで念入りにふき取った。同校によると、新型コロナの感染拡大による長期休校の影響で、授業が始まつた6月以降は過密スケジュールを余儀なくされている。教員は授業の準備に加え、放課後に40分ほどかけて校舎を消毒するなど負担が大きくなっていた。そこで保護者から「手伝いたい」との声が上がり、サポーターが結成された。元小学校教員でサポーターの事務局を務める岸祥子さんは「教員だった当時に保護者や地域の人に助けられた経験があり、恩返しをしたかった」という。布宮英明校長は「感謝の気持ちでいっぱいだ。先生の時間が確保できる分、授業の充実につなげたい」と強調した。感染防止のため、本年度のサポーターは保護者に限っているが、将来は地域住民も登録できるようにするという。学校行事の手伝いなど活動の幅も広げる予定だ。(東京新聞 9月12日)



* 内容に関しては、問合せ先に直接問合せをお願いします

福島・信夫山に『新たな広場』誕生へ

福島市のNPO法人ストリートふくしまは、同市の信夫山の中腹に自然と美しい眺望が楽しめる「おみさか花広場」を整備し、信夫山の魅力向上を図る。芝生の敷設や桜の木の植樹などを進めており、来年3月下旬に新たな憩いの場としてオープンする見通し。広場は羽黒神社の旧参道脇にあり、同市のふくしま未来研究会が土地を所有している。元々は畑だった場所で、4900平方メートルに花木ゾーンと芝生広場・草花散策ゾーンを設ける。花木ゾーンは2月下旬から11月ごろまで、最低でも1種類の花が咲いているエリアとし、ウッドチップを敷いた散策路を整備する。芝生広場・草花散策ゾーンは野芝を張り、桜の木を植樹。広場周辺に生い茂っている樹木を間伐し、市街地や弁天山、阿武隈山系などを望める環境に整える。自然景観に配慮し、ベンチなどの人工物は設置しない。家族連れの利用を想定し、15台収容の砂利敷きの駐車場も確保する。広場の整備は信夫山活性化の一環、このほか、同NPOは広場近くの六供集落にある江戸時代末期建築の古民家を改修し、カフェ営業やコミュニティー施設、イベント開催などへの活用を計画している。工事期間は来年5月~2022年3月の予定。

(福島民友新聞 9月11日)

山古志巡って景品ゲット

新潟県長岡市山古志地域の飲食店や直売所などを巡ってもらおうと、NPO法人中越防災フロンティアは19日、「やまこし散策スタンプラリー」を始める。地域を4地区に分け、それぞれのスタンプを集めた数に応じ、景品などがもらえる。台紙は山古志地域のマップになっている。4地区は虫巣、竹沢、種原、三ヶ・東竹沢で、対象店舗は計20店。3地区的スタンプを集めると、カグラナンパンの加工品やアルバカの縫いぐるみなどがもらえる。全4地区を集めると、山古志産牛肉などが当たる抽選に応募できる。台紙は、やまこし復興交流館おらたるやオーレ長岡、各支所などで配布。スタンプを押した台紙をおらたるに持参し、景品などと交換する。同NPOは「秋が深まる山古志を楽しんでほしい」と呼び掛けている。スタンプの押印は11月15日まで。景品交換と抽選応募は同27日まで。(新潟日報9月11日)

社員の声 働く魅力伝える冊子配布

学校でのキャリア教育を支援するため昨年9月に発足したNPO法人「アスリード」(横浜市金沢区)は、県内と東京の企業40社の社員にインタビューして「働くことの魅力を伝える冊子『みらい百花』」を創刊した。今後、年一回発行し、学校でテキストとして活用してもらうという。県内と東京都町田市の中学~大学の400校に計7万部を無料配布した。食品製造、建築、金型製造など多様な業種で働く若手・中堅社員に取材し、仕事内容ややりがい、座右の銘などを掲載。教員が活用しやすいよう、記事を見て考えしたことなどを書くワークシートも巻末に付けた。共同代表理事の武政祐さんは「新型コロナウイルスの影響で職業体験が難しくなっているからこそ、みらい百花を活用してほしい」と話す。同NPOが県内の56校にアンケートした結果では、職業講話を例年通り開催できるとした学校は二割、職業体験を例年通り開催するとしたのは一割にとどまった。冊子発行後、学校から「職業講話に代わる資料として活用できる」など、感謝の声が届いている。武政さんは「コロナ感染防止のため、外部講師を呼べない環境はしばらく続く。みらい百花を使ってもらおほか、オンライン職業講話ができるよう、学校を支援していく」と話している。(東京新聞 9月9日)

寄席が駄目ならラジオがあるさ

兵庫県三木市のコミュニティーラジオ局「エフエムみつき」で10月5日から、落語番組「みつき落語サロン」が始まる。新型コロナウイルス感染症の影響で出番が激減したボランティアグループ「三木落語研究会」の話芸を録音し、電波に乗せて笑いを届ける。同会メンバーは、昨年度まで養成講座「三木落語笑(しょう)学校」の修了生として地域の催しで話芸を披露。グループ名を改めて再スタートを切った本年度だが、同感染症の影響で8月までは行事への出演などがなくなった。6月までは練習も自粛となり、「コロナ禍でどうしようもない状況だった」とメンバー。3密を避けながら笑いを届けるため、活路を見いだしたのは録音番組だった。同ラジオ局長の大森繁伸さんは以前から「落語に一番合うのはラジオ」との思いを抱いており、「沈みがちな社会に少しでも笑いを提供したい」と番組の開設を決めた。番組は15分で、番組用に上演時間を調整してネタの魅力を凝縮。メンバー6人の持ち回りで古典や新作、小話などを織り交ぜ、1年以上を目標に続ける予定という。メンバーは本番ながら緊張感で高座に上がり、落語を披露。豊かな表情と声色で笑いを誘っていた。(神戸新聞NEXT 9月12日)



ハンドメイド作家の手作り自販機で

アクセスサーなどの手工芸品を自動販売機で買える「クリエイターズ自販機」がこのほど、栃木県小山市粟宮1丁目に設置された。人材育成などを手掛けるNPO法人「あおりんご」(吉田英樹代表理事)が敷地内に1台、8月から試験的に設置した。新型コロナウイルスの影響でイベントの自粛や中止が続出し、苦境にあるハンドメイド作家を支援するのが目的。ジュース用の自販機を転用し、瓶詰めのハンドメイドアクセサリーとマスク、消しゴムはんこなど約20種類を数百円で販売する。自販機の冷蔵機能はそのままのため、マスクは冷え冷えで夏の肌に気持ちがいい。売り上げ1点につき100円の販売手数料は、NPOの活動資金に活用する。近く自販機を2台追加する予定。担当者は「ゆくゆくは敷地内の駐車場をぐるりと自販機で囲み、クリエイターと消費者をつなぐ場にしたい」と話していた。(下野新聞 9月10日)

函館市電「箱館ハイカラ號」1日限り運行

函館市電30形「箱館ハイカラ號」は2020年9月19日(土)、1日限りの特別運転を行います。「箱館ハイカラ號」は1993年に観光電車として復元され、レトロな外観、内装、乗車料金を精算する車掌サービス、函館市内に残る風光明媚な場所とのコラボレーションなど観光客に人気の高い電車です。例年は4月から土・日・祝日を中心に運行していますが、今年は新型コロナウイルスの影響を受け、初めての全面運休となっていました。今回、「函館チンチン電車を走らせよう」とNPO法人「市電の熟練工の技を伝える会」の有志が、「箱館ハイカラ號」の走る姿を見たいという思いから貸切り、限定運行が実現します。乗車することはできません。運行予定期刻は、駒場車庫前を11時32分に出発、湯の川・五稜郭公園前・函館駅前・十字街・函館どつく前・谷地頭を経由して駒場車庫前に14時到着予定です。なお、雨天の場合は翌9月20日(日)に順延されます。(レイルラボ 9月14日)

ルワンダの子ども支援協力呼び掛け

福島市のNPO法人「ルワンダの教育を考える会」理事長の永遠壱マリールイズさん(54)は現在、アフリカ中部・ルワンダに滞在し、子どもたちとストリートチルドレンの支援活動を続けている。ルワンダでは新型コロナウイルス感染症による休校措置が取られており、マリールイズさんは学校再開に向けて、多くの協力を呼び掛けている。考える会が支援を続けているルワンダの首都キガリのウムチヨムイーザ学園は3月中旬ごろから休校している。休校によって給食が食べられない子どもたちも多く、空腹をしのぐため、街で物乞いをする子どももいるという。オンライン会議システムを通して取材に応じたマリールイズさんは「子どもたちは空腹が満たされれば物乞いをしなくなる。学校が始まれば、物乞いをする子どもは減るだろう」と話した。ルワンダでは現在、午後7時~早朝5時の外出が禁止されているほか、公共の場ではマスクの常時着用が義務となっている。マスクが手に入りづらいため、1枚のマスクを洗って共有する家族もいるという。マリールイズさんは、コロナ禍でも現地の子どもたちは「新型コロナみたいな感染症は今後も発生するだろう。このような感染症のワクチンを作る医者になりたい」と目標や希望をしっかりと抱いていると話す。そのような意志を耳にして「子どもたちの思いが無駄にならないように学園を存続していかない。ぜひ皆さんにご協力いただきたい」と呼び掛けた。学園では新型コロナウイルス対策に必要な物資が不足。

(福島民友新聞 9月14日)

子ども食堂が宅配、育児相談

生活に余裕がない子育て世帯に食べ物を無償で届ける「こども宅食」を、徳島市のNPO法人クレエールが10月から始める。子ども食堂に来られない家庭にも支援を広げるのが目的で、県内初の取り組み。配達をきっかけに子育ての相談にも応じ、地域での孤立を防ぐ。届けるのは、弁当や菓子、コメ、パン、野菜、レトルト食品、カップ麺など10食分の詰め合わせ。クレエールが運営するレストランの仕入れ業者や生産者らから寄せられる規格外の野菜や賞味期限が近づいた食品を活用する。

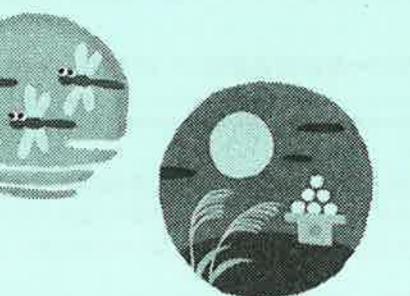
18歳以下の子どもがいる徳島市内の家庭を対象に、10月1日午前10時からウェブサイトや会員制交流サイト・フェイスブックで申し込みを受け付け、月1回自宅に配る。ひとり親家庭や障害児を育てている家族、生活保護や就学援助の受給世帯、夕食の時間までに親が帰れない家庭などを優先する。職員らが食べ物を渡す際に話し掛け、気軽に相談してもらえる関係を築く。クレエールは2018年7月に同市昭和町で子ども食堂を始め、これまでに幼稚から高校生まで延べ約7千人が集まつた。今年6月に万代中央埠頭に移転。新型コロナウイルス感染防止のため、当面は持ち帰りを中心に平日と第4土曜日に運行している。昨春に小学生から「子ども食堂に行きたいくけど、年下のきょうだいと留守番している」との電話があり、支援の要る子どもにも直接届けるこども宅食を企画した。クレエールのサポートを続けている石原金属が食品提供などで協力する。喜多條雅子理事は「新型コロナの影響もあり需要は大きい。子どもたちがおなかをすかず元気に成長できるよう、支援を続けていきたい」と話している。こども宅食は東京都文京区と民間団体が17年に共同で始め、取り組みが全国に広がっている。クレエールは、食品の提供や運営を手伝ってくれるボランティアを募っている。

(徳島新聞9月11日)

西宮のNPO ひとり親家庭の子育て支援

産前産後の家事サポートなどに取り組む兵庫県西宮市のNPO法人「a little(ア・リトル)」は、ひとり親家庭への子育て支援事業を始めた。専用ウェブサイトで事業内容を紹介し、家事サポートの募集や寄付を募っている。1人で家事などをこなしながら育児する「ワンオペ育児」の解消を目指す。同法人は研修を受けた「ボランティア」が買い物や掃除、食事の準備などを有償で手伝う家事サポート事業や、助け合いを促すための集い場づくりに取り組む。本年度から、孤立しがちなひとり親世帯を支援しようと、社会福祉振興助成事業を受け、事業を始めることにした。事業では、登録料千円のみで3ヵ月間、家事サポートを受けることができるモニターを募る。西宮市内のひとり親家庭(別居申込可)が対象で、本年度は10人を受け付ける。モニターが終わったら後も、対象者には西宮を中心活動する子どもや女性を支援する団体の連絡窓口や支援情報などを提供する。

(神戸新聞NEXT 9月17日)



沼津・千本小児童が体験型防犯講座

沼津市の千本小は7日、犯罪に遭わないための知識や不審者から身を守る方法を学ぶ体験型防犯講座「あぶトレ」を同校で開いた。全校児童約60人が不審者と遭遇時の対応など実践を通して身に付けた。NPO法人県防犯アドバイザー協会の米山広三さんらが講師を務めた。米山さんは「見つめてくる」「付いてくる」と不審者の特徴を挙げた。人が誰もいなかったり、周囲が見えなかつたりする場所は危険と指摘し、児童に避けるように注意を求めた。児童は実際に不審者に出くわしたときの対応の指導を受けた。話しかけられても「嫌です。行きません」と断る練習や、走って逃げる訓練に臨んだ。2年の生徒は「走って逃げるのが良いとわかった」と話した。(静岡新聞 9月8日)

参加型ミュージカル新市民会館フレ事業

岡山市は新市民会館「岡山芸術創造劇場(仮称)」の開館に向けたフレ事業として、11月に市民参加型で「わが町ミュージカル」を上演する。地元の表町商店街(同市北区)に伝承されてきた「乱投(らんとう)キツネ」の物語を基にしたプロジェクト。出演者は今月15日まで募集している。商店街のそばに江戸時代から1945年の岡山空襲で焼失するまであった実家の鐘撞堂(かねつきどう)にまつわる物語。鐘の音で寝覚を邪魔されたキツネと町人のやりとりをベースに、歌やダンスを交えたミュージカルに仕上げる。2017年度から市と共同で、商店街を題材にした街頭劇や映画を作成してきたNPO法人アートファーム(同市)が脚本制作や演技指導を行う。出演者は小学生以上が対象。演劇経験などは問わない。出演人数は数十人を想定しており、20日にオーディションを行って選考する。併せて運営スタッフも募っている。上演は同商店街で11月22、23日に行う。アーケード街を移動しながら披露し、新型コロナウイルス感染症対策として、観客の密集防止などにも取り組む。(山陽新聞 9月13日)

福岡「もう一つの学校」NPO法人10月開設

福岡市内でフリースクールや学習塾、通信制高校サポート校を運営している認定NPO法人「エデュケーションエーキューブ」は10月、新たな学びの拠点を大野城市に開設する。今月15日までクラウドファンディング(CF)で施設の整備費などを募っており、公教育とは別の選択肢となる「オルタナティブスクール(もう一つの学校)」を目指す。法人は2014年、パソコンを使った低料金の個別指導塾を福岡市西区に開校。17年と19年に、フリースクールなどを西区と東区に1カ所ずつ設けた。小学校でのプログラミング教育必修化に合わせて、科学技術分野の独創性などを養う「STEM教育」も導入している。大野城市的拠点では、これまでの経験やノウハウを生かし、既存の学校になじめなかつたり、不満があつたりする子どもを受け入れる方針。大和証券グループとNTTドコモからの助成金を活用して賃借する民家をリフォームし、CFで集めた資金により大型モニターや本、ウッドデッキをそろえていている。また、タブレット端末を1人に1台配ることで、自らの課題に沿って学べる環境を整える。ほかの拠点も含め授業料は、利用日数に応じて月1万2千~3万5千円程度。経済的に困窮している家庭の授業料は最大7割減額しており、開校中のスクールには小中高生の計約50人が在籍している。法人の草場勇一代表理事は「既存の学校生活が合わない子どもたちにとって、ほかに学びの選択肢がないのが現状。学校の代わりになるような充実した学びを提供していきたい」と話す。(西日本新聞 9月13日)

「あなたは病気で仕事を辞めますか？」



公益総研株式会社 主席研究員兼CEO

公益財団法人公益推進協会 代表理事

(特非)国際ボランティア事業団 理事長 福島 達也

今回の安倍総理の辞任を受け、改めて「潰瘍性大腸炎」っていう難病は「不治の病」「かかったらおしまい」的なイメージを強めた人は多いのではないだろうか・・・。今回初めて知ったのだが、安倍総理は前回の辞任の直前ではなく、中学生の時からこの難病に苦しめられていたらしいのだ。その第1次安倍内閣発足後、2007年に突然の辞任を表明した当時は、下痢や血便、強烈な腹痛で1日20回以上もトイレに駆け込み、満足に眠れない夜が続いていたと報道されたのだが、今回も恐らくそうだったのだろうか・・・。一国のトップを2度にも渡って辞任に追い込むとは、潰瘍性大腸炎、恐るべし。

あれ？？何か聞いたことがある病気だなあ・・・そう！実は私もこの難病の患者だったのだ！！

今から3年前くらいだったか、本当にその当時は、安倍ちゃんの苦しみが良くわかつたくらい、仕事をするのがとてもつらかった。もちろん、日本一仕事をする男と異名をとる？？私のことだ。仕事を休むようなことはなかったが、相手に具合が悪いことを悟られないよう、職員に要らぬ心配をかけないよう、顔で笑って、でも全身冷や汗の連続だった。本当につらかった・・・。え？？今は？？？

そう、難病なので完治はしないらしいが、自分にとっては完治したと思っている。もちろん、安倍ちゃんみたいに再発する恐れが十分あるので、気にはしているが・・・。ただ、大部分の患者さんは仕事や勉学との両立をなし得ているのがこの病気なのだ。難病指定されているのにダ！完全に治すことはできないまでも大部分は薬物療法等の治療によって回復し、症状が出ないよう薬でコントロールしながら、病気になる前と同じ生活が続けられているというのである。私は自分を完治させたと思っている「漢方」を欠かしたことがない。（完治したと思っていても飲み続けているのだから、本当は完治ではないのかもしれないが・・・）

さて、あなたならどうするだろうか？仕事を辞めますか？？辞めても養ってくれる人がいるのであれば、それは休養すべきだろう。しかし、私のように、家族や職員のために、おいそれと休養などできない人はたくさんいるだろう。もし、毎日苦しい時間が訪れるような病気になっているのであれば、治療と仕事の両立を続けるには、やはり働き方のコントロールが重要だろう。再燃や重症化してしまう人は大抵、忙し過ぎて薬を指示通りに服用できなかったり、軽症のうちに受診することができなかったりして、それを放置してしまう人ではないだろうか。

私は気合と漢方で克服したが、私と同じようなことが普通の人にはできないだろう。なので、病気を悪化させないためには、可能であれば病状に合わせて継続できる仕事に転職したり、病態悪化時は周囲を頼ってお休みしたりすることが理想的だ。

例えば、自営業や経営者であれば、それまで社長として先頭に立って陣頭指揮を執っていたらしく、そういう働き方をやめて、職員にほとんどの仕事を任せて監督だけに徹するとか、お医者さんなら、ある程度時間の自由の効く（特に夜勤のない）仕事に転職したりとか、サラリーマンなら簡単に休みが取れないような職場ではなく、休みがとりやすい職場に異動をしたりとか・・・。だが、そんな甘い職場ばかりではないだろうから、やはりここは制度を作るしかないだろう。「働き方改革」が進む昨今だが、上に立つ人間ほど、自分の働き方を改革するのは難しい。社長であれば、私のように、正月からほとんど一日も休まず仕事をしている人もいるのだ。潰瘍性大腸炎のような一生付き合わなければならない病気にかかってしまった場合には、自分自身に対して思い切った改革を実行するには、そういう制度を作ってもらうしかないだろう。

そういう意味で、安倍ちゃんがここは試金石となって辞めないとほしかった・・・。安倍ちゃんが総理の仕事が病気でもできるようになれば、きっとそのような制度を厚労省も作って、病気で苦しんだり悩んだりしている多くの人を救うだろう。安倍ちゃんにはぜひ辞任を撤回して、病めるものの立場となって、それでも仕事ができる社会にしてほしい。だって、日本では毎年約1万人、潰瘍性大腸炎の患者数が増加しており、2017年の統計では20万人以上の患者がいると推定されている。潰瘍性大腸炎以外の病気も星の数ほどあるし、苦しんだり悩んだりしている人も星の数ほどいるだろう。難病だから、罹患したから仕事を辞めるっていう風潮には絶対になってほしくない。そうなっても、仕事が続けられるシステムをぜひ構築すべきだし、それができないとますます人口減で、人が足りなくなつて日本経済がますます停滞するだろう。

ということで、私は今日から仕事を半分にします！！！なーんて、できればいいなあ・・・死ぬまで無理かも（笑）

.....CEOコラムバックナンバーはこちらから→ https://www.iva.jp/nposouken/ceo_column.html

編集後記

先週の大型台風10号。九州在住の親戚は、家近くの川が氾濫の危険性があったため早々に避難したそうです。結果、予報ほどの被害もなく帰宅し、「何も無くて良かったね」で済みました。台風に慣れている地域だからこそ、いつもと違う状況の時は早めの避難を心がけています。「あの時避難しておけば…」と後悔しないためにも、災害の危険性があるときは早めの避難をお勧めします。

(せん)